

## 浄土を求めさせたもの — 『大無量寿経』を読む—

### 第112回 (2018.06.18) の要旨

拝読文(『真宗聖典』58～59頁)

然るに世人、薄俗にして共に不急の事を諍う。この劇悪極苦の中において身の営務を勤めて、もって自ら給済す。尊もなく卑もなし。貧もなく富もなし。少長男女共に銭財を憂う。有無同然なり。憂思適に等し。屏営愁苦して、念いを累ね慮りを積み、心のために走せ使いて、安き時あることなし。田あれば田を憂う。宅あれば宅を憂う。牛馬六畜・奴婢・銭財・衣食・什物、また共にこれを憂う。思いを重ね息を累みて、憂念を愁怖す。横に非常の水火・盗賊・怨家・債主のために焚漂劫奪せられ消散し摩滅す。憂毒怱怱として解くる時あることなし。憤りを心中に結びて憂悩を離れず。心堅く意固く、適に縦捨することなし。あるいは摧碎に坐して、身亡び寿終われれば、これを棄捐して去りぬ。誰も随う者なし。尊貴豪富もまたこの患えあり。憂懼万端にして勤苦かくのごとし。もろもろの寒熱を結びて痛みと共に居す。貧窮下劣にして困乏して常に無けたり。田なければまた憂えて田あらんと欲う。宅なければまた憂えて宅あらんと欲う。牛馬六畜・奴婢・銭財・衣食・什物なければ、また憂えてこれあらんと欲う。適一つあればまた一つ少けぬ。これあればこれ少けぬ。齊等にあらんことを思う。適具さにあらんと欲えば、すなわちまた糜散しぬ。かくのごとく憂苦して当にまた求索すれども、時に得ること能わず。思想して益なし。身心俱に勞れて坐起安からず。憂念相隨いて勤苦かくのごとし。またもろもろの寒熱を結びて痛みと共に居す。ある時はこれに坐して、身を終え命を夭ぼす。肯て善をなし道を行じ徳に進まず。寿終え身死して当に独り遠く去る。趣向するところあれども、善悪の道能く知る者なし。

\*\*\*\*\*

このあたりは大切な部分でありますけれど、やや分かりにくいところでもあります。前回拝読したところででてくる「安養国に往生せよ」という「安養国」の問題、そして「横に五悪趣を截る」とある、「横さま」の問題。そういうところに注目して、親鸞聖人が大切に扱おうとしておるところでございます。

前回の箇所に戻りまして「自然」ということが出てきておりました。この自然については教学の上では三自然ということが言われていますが、ここの辺りの「横に五悪趣を截る」というのは、教学的な意味づけで言うと、「願力自然」という言葉で言われる自然のことだと思います。『聖典』602頁のところでは親鸞聖人は、「南無阿弥陀仏」と誓って衆生に呼びかける時の願力の働きが、「自然」という意味をもつとしています。つまり「おのずからしからしむ」と。そのような註釈をされ、この自然は行者のはからいではないと言うわけです。行者のはからいを交えず、如来の誓いとして衆生の上に成り立つ仏道を、自然という言葉で教えているのだとおっしゃっているのです。

しかもこの願力自然のはたらきは、横さまにはたらくという形で表現されます。我々の意識は豎さまに、つまり自分で超えていこうという発想があります。それを横から破るように願力がはたらくという。願力がおのずからしからしめるというはたらきを、親鸞聖人は見ているのです。それは不可思議のはたらきであって、我々が考えたり意識してそうなるという話ではありません。願力のはたらきを信ずるなら、願力不思議の信心のはたらきで、おのずから大涅槃にいたらしめられると信じるのが大切とされるのです。前回拝読した最後の部分では、「行き易くして人なし。その国逆違せず。自然の牽くところなり」とあります。ですからこの自然は、おのずからしからしめられるという形で浄土に生まれしめられるということを言っているのです。

そしてそこから、今回拝読いたします次の頁に入りますと、ガラッと方向が変わります。ここは一般に「三毒五悪段」と呼ばれるところです。

「然るに世人、薄俗にして共に不急の事を諍う」というところから始まります。世の中の人は、薄俗、

つまり軽薄で俗っぽいというわけです。そのため「共に不急の事を諍」い、本当に急いで求めなければならぬことに気づくことができない。だから現在自分に差し迫ったことに取り組むわけですが、それが実は急がなくてもよいことなのだとことです。我々は与えられた仕事を慌てふためいてやっつけることで人生のほとんどを送ってしまうのですが、それが実は不急の事であり、もっと大事なことがあると教えるためにこういうことを言っているのだと思います。

「この劇悪極苦の中において身の営務を勤めて、もって自ら給済す」。この世の中には激しい悪や苦悩がある。その中でそれぞれが与えられた勤めを行い、自分を支えている。そこには「尊もなく卑もなし。貧もなく富もなし」ということで、誰もが自分に与えられた勤めを一生懸命やって自分で生きていくというのが世の中のあり方です。そして「少長男女」、つまり老いも若きも男女の別もなく、「共に錢財を憂う」と。錢財を憂うということは、人間の病気みたいなものですね。犬や猫は錢財を憂うことはない。これは人間の固有の問題です。それは「有無同然なり」、つまり、貧富であろうと、尊卑であろうと、この錢財が有ろうが無かろうが、「憂思適に等し」く、同じように悩むということです。

そしてこう続きます。「屏営愁苦して、念いを累ね慮りを積みて、心のために走せ使いて、安き時あることなし」。つまり屏営愁苦というのは、営みを回して憂い苦しむ。そして念いを累ね慮りを積む。念いが何時もいつも錢財を憂うという方向に引きずり回されて、心配事を生じさせる。安んずることができない。夜も昼も四六時中心配でたまらない。そして「田あれば田を憂う。宅あれば宅を憂う。牛馬六畜・奴婢・錢財・衣食・什物、また共にこれを憂う」と。田んぼを持ったら田んぼを持ったでそのことが心配でたまらない。田んぼが無ければ田んぼが無いで欲しくてしょうがない。「宅あれば宅を憂う」。家を持ちたいと思うのだけれど、家を持ったら持ったでいろんなことが心配になる。「牛馬六畜・奴婢・錢財」。牛があろうと、馬があろうと心配であるし、「奴婢」というのはこの時代に既にあった奴隷制です。奴隷というのは人間なのだけれど、人間が所有するのです。主人の持ち物ですから人間扱いされない。そういう身分なのですね。人間の罪の深さですが、全部所有しようとするわけです。所有物は自分の勝手に出来るという、そういう考え方ですから。犬であろうと、猫であろうと、馬であろうと、牛であろうと、自分の持ち物だから自分の勝手に出来るという。そういう観念ですね。「奴婢・錢財・衣食・什物」、とにかく衣食住のすべてを持ってば持ったで憂う、無ければ無かったで憂うのです。「思いを重ね息を累みて」。つまり、そのことについての思いが重なり、その上に愛情がかかってくる。そして、「憂念を愁怖す」。つまり、憂いを念う。「憂念」に「いきどおり」とルビが振られています。自分の所有物に愛着が起こってくると、それが奪われたり失われると憤りが起こるわけですね。そういうように意念がむらむらと起こるわけですね。

そして「横に非常の水火」。この場合の「横さま」は自然界が襲ってくる横さまです。今朝も大阪で地震がありましたけれど、ああゆうふう人間生活を思いもかけぬ形で襲ってくることを横さまと言います。「横に非常の水火」。東日本大震災では津波で原発がやられました。その時想定外という言葉が出ましたが、当たり前のことです。自然界の規模というのは、人間の思いなど無関係に横さまに来るわけですから。そして「盜賊・怨家」。怨んでいる家というのも、農村地帯などで代々その土地に縛られて生活している場合は、怨みがつっていくのです。そういうことが、ここで言われているわけです。「債主」というのは、借金をしている当人のことです。「債主のために焚漂劫奪せられ」、焚かれたり、水没させられたり、殺されたりということでしょうか。そういうことをされて、「消散し摩滅す」と。まったく消されてしまったり、すり減らされてしまったりして、「憂毒松松として解くる時あることなし」と。つまり、憂いとか悩みとか、そういうものが私どもを動かして、そこから解放されることがない。いつでもそういうものにつき動かされて、自分が自分でないようにさせられている。「憤りを心中に結びて憂悩を離れず」。憤懣が心の中に動いて、憂いが離れない。この三毒段に入ってから、憂うという字が続いていますが、それはこの世俗生活の根底にずっと動いているような心情を表しているのでしょうか。鬱状態になるとか、あるいは自己嫌悪に陥るとか、中には自殺するとか。その根にあるのがこの憂毒と言われるような、憂鬱感というような根本的な気分なのだと思います。それは現代に限ったことではありません。世俗生活の根底にあるものです。この経典が語っているのは、紀元2世紀頃の中国ですが、すでに錢財がありました。素朴そうに見える時代であっても、人間が生活するところには、

いつも所有したいということがあり、それは憂毒とか憂悩といった言葉表されるような気分があったのでしよう。

「心堅く意固く」。心とか意という言葉で翻訳されてくる元の梵語は、チッタ (citta) という言葉とか、意はマナス (manas) という言葉ですが、人間の意識生活にはいろんな相があって、それを中国語では心とか意として表されています。そしてそれが、どちらも硬いという。つまり意識が、憂いというものがあるために、閉鎖的になるというイメージですね。硬くなるということは、固着して心が通じにくくなる。溶けにくくなると。心が通じ合うというのは柔らかいイメージですが、通じ合わなくなると硬い感じがします。通じなくさせる硬さをもった心になってしまうと。

「適に縦捨することなし」。「縦捨」、縦に捨てると書いていますが、縦というのは、放縦というように使われることもあって、ほしいままにというような意味も持った字です。しかし硬い心を持ってしまっているから、それを自分から解き放つということが出来ないということです。だから捨てることができない。そういう執着が憂いと重なり、我々はこの世を生きているので、なかなか面倒なのです。

「あるいは摧碎に坐して」。「摧碎」、この摧も碎も砕くという意味です。この「坐」という字を「つみして」と読んでいますが、親鸞聖人の「化身土巻」の流罪のところに、この坐の字が使われています。「つみする」ということは、この世での行為が取り上げられて、天罰ないし罰が与えられるといったことを表す言葉です。摧碎に坐するというのは、つまり坐の生活をしたことによって、完全にあらゆることが木っ端微塵につぶされるというようなニュアンスのことを表現しているわけです。

「身亡び寿終われば」。身体が死ぬということ、寿命も終わるということですね。大体我々の生命は、身体と共にこの世の生が与えられて、身体と共に死んで行きます。身体が機能しなくなることが死ぬことですね。身亡び寿終ると。ただこのごろでは、命が終わるということと、身が亡ぶということとに、わざと時間差をつくるようなこともありますね。つまり寿命は終わっているけれども、心臓は動いているということがあります。心臓は身の一部ですから、科学技術の力で心臓だけ生かしておく。でも脳の方は死んでいますから脳の機能はもうない。つまり脳波はもう出なくなる。脳波が出なくなることを基準として命が終わったことにして、身の一部の心臓は生かしておき、その心臓を移植する。このようなことが技術的に可能になったものだから、「身亡び」と「寿終わる」は必ずしも一致しないということが起こっています。しかしこれは現代の大問題ですね。つまり生命倫理ということが言われるのは、これがはたして本当に良いことなのか、許されることなのかということが大きな問題になるからです。科学的な技術によってそれまで不可能であったことが可能になると、今度はそれがはたして倫理的に許されるのかという問題が生じてしまう。今は胎児の検査などでも、そういう問題が出てきています。はたしてそれが良いことなのかということが大変な問題になるわけです。

さて、そういうふうにして「摧碎に坐して、身亡び寿終われば、これを棄捐して去りぬ」と言われます。命が終わったならば、捨て去って。棄も捐も捨てるという意味です。もう亡くなったならパッと居なくなってしまうと。「誰も随う者なし」。生きていた内こそ権力があつたり財力があつたりするけれども、亡くなってしまったらもう誰もついていかない。「尊貴豪富もまたこの患えあり」。尊というのは、昔は貴族制や君主制がありましたから、そういうものが尊貴ですね。尊貴というのは、もちろん人間が作り出したものなのですから、人間は所有欲があると同時に自我の思いがありますから、自分の子孫に権力やら財力やらを伝えようとする。そういうことによって人間の社会に差別構造が作り出されるために、尊貴というものが生まれてくるわけです。豪富もそうですね。富の力で金持ちの一族郎党が作られる。しかし尊貴であろうと、豪富であろうと、同じことです。命が終わった途端に誰もついてこないのです。この「患」という字を「うれえ」と読みますね。これは呉音読みすると「げん」となります。「患え」ということは、前の憂毒の憂の字とはちょっとニュアンスが違いますが、どちらも日本語では「うれえ」、古語で「うれい」と読みます。この患は精神的な患いです。心配で気になって仕方がないというわけです。

「憂懼万端にして勤苦かくのごとし」。「懼」は「おそれ」という字ですね。憂いと懼れがたくさん襲って来て、それに苦しむ。人間が生きていたということが、勤苦になる。自分の心理として自覚できないような深いところからもよおして来る憂いです。そしてそれは怨みつらみ、ねたみそねみといった

煩惱とと共に動いて来て、そういうものが、結局人間をつぶしていくのです。「もろもろの寒熱を結びて痛みと共に居す」。寒かろうと暑かろうと、痛みとかそういう憂いや悩みの痛みと一緒に生きて行くのだと。「貧窮下劣にして困乏して常に無けたり」。貧乏であったり、窮乏したりすれば、そういうものは劣っていたり困っていたり、乏しかったりする。常に欠けている。いつでも無いと。そして「田なければまた憂えて田あらんと欲う」。無ければ無いで、有ったら良いなと思いつける。「宅なければまた憂えて宅あらんと欲う」と。無ければ無いで欲しいと思う。「牛馬六畜・奴婢・錢財・衣食・什物なければ、また憂えてこれあらんと欲う」。有ったら有ったで心配が尽きない。無かったら無かったで欲が尽きない。有ろうと無かろうと、この世を生きる有り様というのは、在り方として同じようなことなのだ。「適一つあればまた一つ少けぬ。これあればこれ少けぬ。齊等にあらんことを思う」。齊等というのは、平等ということですね。等しく同じように与えて欲しいと。こういうふうに思うと。「適具さにあらんと欲えば」。「適」という字を今度は「たまたま」と読んでいますね。つぶさにあらんと欲えば、一つ一つのことが、具に、細かいことから全部あろうと思うならば、「すなわちまた糜散しぬ」。たちまち無くなってしまうと。「かくのごとく憂苦して当にまた求索すれども」。憂い苦しんで、そして求める。「時に得ること能わず」。求めてみるけれども、ちょうど良いように与えられるわけではない。「思想して益なし」。そういうことを幾ら思ってみても、その益はない。「身心俱に勞れて坐起安からず」。「勞」という字を「つかれる」と読んでいますね。働くことによって身心が疲れてしまう。そしてこの場合の坐は、先ほどの坐するではなくて坐起ですから座ったり立ったりという。そういう意味では生活すること自身がもう心身共に疲れて、座ったり立ったりすることも安心出来ない。困難だということです。「憂念相随いて勤苦かくのごとし」。ここに「憂」が出てきますね。憂念相随いて勤苦かくのごとし。「またもろもろの寒熱を結びて痛みと共に居す」。寒いとか暑いとかということがあり、痛みをもって居るということです。「ある時はこれに坐して身を終え命を夭ぼす」。つまりこれまで語って来たような憂念、憂毒、といったものによって、生活が完全に潰されるような命であると言われるわけです。

「肯て善をなし道を行じ徳に進まず」。善をなして道を行じ徳に進むことをしない。「寿終え身死して当に独り遠く去る。趣向するところあれども、善悪の道能く知る者なし」。人間は本来独りではありません。生まれる時も親から生まれてくるし、亡くなる時も共同体に弔われます。しかし人間が独りと言われる場合には、やはり孤独にさせる原因があるのです。それが、ここでずっと言われてきたような憂いを背景に生じる所有欲といったものです。自分の所有が中心となって生活を動かすものだから、人が見えなくなり、孤独になっていく。現代では孤独死、孤独ということが言われますけど、これは人間生活が始まった時から、老少男女を問わず生じている問題です。みんなどこかで自我の思い、自分中心主義があり、他人のことなどかまっていられないですから。そういう思いが動けば孤独にならざるを得ない。そして死ぬ時はどうだろう。これは大変な問題です。そういう形で、本当に人間が共同体を感じながら、共同体に感謝して、共同体と共にある在り方を回復しなければいけないはずなのに、どんどん孤独になっていると。こういう方向があることをこの経典が言い当てているわけです。

さて、ここまでが一段です。何回も同じようなことが繰り返し語られています。それを通して三毒段ということが言われます。ここまでは食欲が問題となっていました。そしてこの次からは瞋恚の問題であり、さらにその次は愚痴の問題ということで、三毒段であると一般に言われます。ただ、三毒段とは言われますが、しかししっかり読んでみると、それらすべては重なっています。憂いがあり、そこに怨みが生じて、怒りや憤りが出てくるわけですから、食欲の問題だけではないわけです。だから三毒というのはひとつの解釈であって、これは食欲だと言うように押さえるのは、ちょっと図式的にすぎる解釈かもしれませんね。そのことだけを申し上げておきましょう。ちょっと急ぎましたけれど、今日はここまでとさせていただきます。

文責：長谷川琢哉（親鸞仏教センター研究員）